

# 「歴史総合」のカリキュラム・マネジメントに関する一考察(1)

—『過去を表現する』シリーズを手がかりに—

竹中伸夫

## A study about curriculum management in General History(1)

: Based on an analysis of the textbook series “Presenting the Past”

Nobuo Takenaka

(Received September 28, 2018)

### I. 問題の所在

本小論の目的は、イングランドの歴史教科書シリーズ<sup>1)</sup>の分析を手がかりに、まもなく我が国の高等学校に導入される、科目「歴史総合」の教育効果をより高めるために必要な、教師によるカリキュラム・マネジメントの指針となりうる、同シリーズの教育内容編成構造を解明することにある。

平成30年3月に高等学校の次期学習指導要領が公示された。そこでは、地理歴史科において、「歴史総合」という必修科目が新設された。同科目は、①近現代の歴史を中心に、②世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉えること、③単元や内容のまとまりを重視した学習を展開すること、④歴史の推移や変化を踏まえ、課題の解決を視野に入れて、現代的な諸課題の形成に関わる歴史を考察すること、⑤歴史の学び方（「類似・差異」、「因果関係」に着目する等）を習得すること、といったいくつかの特質が示されている<sup>2)</sup>。こうした特質を真に備えたカリキュラムを、同科目において構築するためには、学習者それぞれの特質を十分に理解した上で、教える側による学習者に応じたカリキュラムの再構築（カリキュラム・マネジメント）<sup>3)</sup>が必要となる。ならば、教える側は、どのようなカリキュラムを再構築すればいいか、そのための構造や原理の解明が必要となる。

そこで、本小論では、『過去を表現する』シリーズをとり上げ、同シリーズを分析することで、「歴史総合」のカリキュラムをマネジメントするための手がかりを得ようとするものである。同シリーズを分析対象とした理由は2つある。1つは、イングランドの歴史教育のための教材であること。同地域の歴史教育は、先行研究などからも、上記特質のうち、②や⑤を有してい

ることがすでに解明されている<sup>4)</sup>。同シリーズも、兪氏によって部分的に分析され、上記②の観点からの内容編成の特質と構造が解明されている<sup>5)</sup>。ただし、兪氏の先行研究は、全4巻のうち第4巻だけを取り上げて、自国史と世界史の融合の方略について解明したものでしかない。今回改めて全巻を通して同シリーズの特質を検討した結果、同シリーズには、②に加え④の特質も有していることが確認できた。そのため、先行研究の分析の不十分性と同シリーズの内容編成の特異性が、同シリーズを取り上げる2つ目の理由である。

なお、同シリーズは、イングランドのKS3（11～14歳）の学生を主たる対象として出版されたものではあるが、上記2つの理由より、あえて分析対象とした。

以下、Ⅱで同シリーズの全体構成を巻ごとに詳細に検討し、Ⅲで同シリーズの教育内容編成構造を明らかにしよう。

### Ⅱ. 『過去を表現する』シリーズの全体構成

本シリーズの全体構成を明らかにするために、表1を作成した。表1の「単元名」に関しては、分析対象より訳出した。また、「主な学習内容」に関しては、分析対象をもとに筆者が要約して記載し、「学習の構造」に関しては筆者の分析に基づく。以下、この表1をもとに、同シリーズの全体構成を巻ごとに詳細に検討しよう。

i) 第1巻の構成－比較分析を主眼とする方法の理解のための内容編成－

第1巻は、1066年から1500年を対象とし、大きくは3つのパートに分かれている。これら3つのパートはそれぞれ、王政、宗教、日常生活というテーマを扱っている。なぜ、中世を学習するにあたり、これら3つのテーマだけなのだろうか、これら3つに共通する条

表1 『過去を表現する』シリーズの全体構成

単元名		主な学習内容と学習の構造						
巻	章	節						
ブリテン 1066-1500 『過去を表現する』シリーズ	王国の統治: ハイリスク・ ハイリターンの ゲーム	事実確認: ウィリアム征服王	事実確認	導入	絶対王政			
		1066年: 3人の後継者へのインタビュー	イギリス史上もっとも有名な 王位継承戦争としてのヘース ティングスの戦い	王位継承と 権力闘争				
		ウィリアムの勝利は確約されていたか?						
		ウィリアムは幸運で賢明だったか?						
		ヘースティングスの戦い: 死闘						
		ヘースティングスの戦いを再考する						
		ノルマン人による統治を受け入れてもらうために ウィリアムの成功						
		ウィリアム2世の死をめぐるいくつかの謎	王位継承をめぐる権力闘争					
		マチルダによる権力獲得のための企て						
		殺しのライセンスは与えられていたか? ベケット の死	教会権力との対立					
		ヘンリー2世とベケット: 致命的な対立?	当時の司法	王権とその政 治(君主制)				
		ローヤル・ジャスティス						
		情け深い判決の謎						
		国王軍: 騎兵隊と歩兵隊						
		ジョン王と家臣						
	マグナカルタ							
	イングランドとケルトの土地							
	城塞施設の改良	当時の対外関係						
	ウィリアム・ウォレスの死をめぐるいくつかの謎							
	君主制が直面した諸課題	まとめ						
	宗教の権力	異端審問: 火あぶりの刑	教会中心の社会であったこと					
		教会がすべてを握っている						
		地獄へのいざない						
		天国への行き方	日常と教会					
		修道士と修道女の日常						
		私はどの修道会に所属すべきか?	非日常(巡礼)と教会	当時の宗教 の実情	宗教中心 社会			
		宗教と法						
		聖地巡礼						
		聖なる旅か単なる休暇か: すべての巡礼が宗教 的なものだったのだろうか?	教会の変節					
		巡礼に際し遭遇した危険						
	ウィリアム・チャーターと教会							
	なぜユダヤ人は迫害されたのか?							
	中世末期の教会は、墮落していたか否か?	まとめ						
	中世において、なぜ教会はそれほどまでに重要 な存在だったのか?							
	中世の人々: 苦しい生活 を送っていた のか?	資産を見せろ: ドゥームズデイ・ブック	文字資料の有効性	研究方法の 理解	過酷な日常 生活			
		中世の人々についてよりよく知るために	非文字資料の有効性	当時の暮らし ぶり				
農奴にインタビュー		過酷な農村での生活の実情						
地主の権力		その原因としての福祉の未整備						
騎士道精神は、貧民の生活を改善したか?		過酷な都市での生活の実情						
慈善活動は、貧民の生活を改善したか?								
それはおとぎ話か悪夢か: 都市への逃散		その原因としての未熟な医学						
ロンドンに住むということは、喜ばしいことだっ たのか、あるいは苦痛だったのか?								
中世の都市はいかに不潔だったか?								
中世医学という奇妙な科学		抵抗としての農民一揆						
黒死病の呪い								
黒死病の後: 人々は幸福になれたのか?		まとめ						
農民一揆								
ロンドン塔での処刑								
人々の生活はどれほど厳しかったか?								
エリザベス1 世と彼女が 直面した問 題	事実確認: テューダー王家の諸王	テューダー朝の諸王の業績		スタートラ インの確認	方法の理 解			
	1558年11月17日のヨーロッパの概要	エリザベス1世統治直前の対外関係に関する 事実確認						
	1558年11月17日にエリザベス1世が抱えてい た諸課題	エリザベス1世が抱えていた諸課題の列挙						
	まずは何から手を付けるべきか?	婚姻	国内の融和					
	旦那探し?	宗教政策						
	生きるか死ぬかの重要な問題としての宗教							
	カトリックとプロテスタントの対立							
宗教-エリザベス1世の妥協								
とうとう結婚か?	跡継ぎ							

現代イギリス社会の諸課題を考察・解決できる市民の育成

比較分析

現在にも存  
在するテー  
マを取り上  
げることで  
判明する過  
去の異質性  
と類似性の  
理解

	スコットランドのメアリー女王は、エリザベス1世にとって、なぜそれほど悩みの種だったのだろうか？	対スコットランド	対立の克服	エリザベス1世が具体的にやったこと				
	スペインのフェリペ2世は、エリザベス1世にとって、なぜそれほど悩みの種だったのだろうか？	対スペイン						
	スペインのアルマダ艦隊：フェリペ2世の計画の卓越性							
	アルマダ艦隊敗戦に対する現在のスペインの見方							
	イギリス国教会にとって、より脅威だったのはカトリックかピューリタンか？	国内の敵対勢力						
	エリザベス1世が行った貧民救済策	貧困問題						
	エリザベス1世は、自身の統治時代、どれほど首尾よく諸課題に取り組んだか？	中間まとめ:エリザベス1世の統治によって何がどう変わったか(因果分析)						
ブリテン…1500-1750	チャールズ1世とオリバー・クロムウェル	事実確認：ステュアート王家の諸王	ステュアート朝の諸王の業績	清教徒革命期の国内情勢の推移	二つの内乱を通じた勢力関係(自国と他国の関係性)の推移			
		チャールズ1世：評価が逆転した？	清教徒革命を誘発したチャールズ1世の評価が近年見直されつつあること					
		統治者の良しあしを決めるもの	王にインタビュー					
		王にインタビュー	清教徒革命の概要					
		清教徒革命の対立構造	「外敵のいないこの戦争」？					
		議会派は結束できていたか？	清教徒革命の推移					
		ニューモデル軍は、どのようにして組織されたか？	清教徒革命の結果					
		1649年：最終的に権力を握ったのはだれか？	清教徒革命に関する解釈が見直されつつあること					
		歴史家と映画製作者は、同じ出来事をなぜ異なって表現するのだろうか？	オリバー・クロムウェルは「戦争犯罪者」だったのか？					
		オリバー・クロムウェルは「戦争犯罪者」だったのか？	清教徒革命のその後					
クロムウェルの死後、何が起きたか？	イギリス継承戦争の結果の確認	イギリス継承戦争期の対外関係の推移	過去の社会との関わり					
カロデンの戦いの顛末	なぜそのような結果になったのかの原因分析							
ジャコバイト派とはだれのことか？	イギリス継承戦争の推移							
ジャコバイト派が勝利するために必要だったもの								
反乱1：アイルランドにて、1689-1691年								
反乱2：スコットランドにて、1689年								
時代はジャコバイト派に味方したか、それとも敵対したか								
反乱3：スコットランドとイングランドにて、1715年								
1715-1745年：ステュアート王家の返り咲きを願った者たち								
反乱4：スコットランドとイングランドにて、1745-1746年								
ジャコバイト派のその後		イギリス継承戦争のその後						
1746年のヨーロッパの概要		結果の確認						
時代のイメージ	時代のイメージ：肖像画から、エリザベス1世について、何が読み取れるか？	肖像画に描かれたものとその意味や意図の分析	同時代の資料	表現されたものを資料として用いることの有効性と課題	過去の社会との関わり			
	晩年のエリザベス1世	20世紀の映画『エリザベス』は事実か	現代の資料					
	肖像画が伝えていないこと							
	現代の映画を歴史的証拠として活用してもよいか？	19世紀の歴史観に基づく時代展	19世紀の表現と解釈			表現された過去のものの相違性とその要因としてのその時代		
	いつの時代のイメージなのか？展示1：19世紀の歴史家マコーレーの国家像1500-1750	20世紀の歴史観から選択した20枚の絵画	20世紀の表現と解釈					
	絵画展	20世紀の歴史観に基づく時代展						
	展示2：現代の歴史家デービスの国家像1500-1750							
ブリテン…1750-1900	何もかもが変化した：産業革命	現在のブリテンは工業化している	工業化とは何か	事象の確認	事象の正の側面の理解			
		農業における変化：1750-1900	工業化の推移(変化)の分析					
		輸送における変化：1750-1900						
		産業における変化：1750-1900						
		思考実験：もし鉄道がなかったら、産業革命はどうなっていただろうか？	工業化がもたらしたものの分析					
		ますます増加する人口						
		産業革命：原因と結果						
		新しい機械と動力						
		犠牲と利益：奴隷は産業革命を金銭的に支えたか？						
		女王のリーズ巡行	工業化が都市生活に与えた負の影響	工業化への抵抗		事象の負の側面の理解		
工業都市における日常生活								
当時の労働環境								
				変化・因果分析	勢力関係(自国と他国の関係性)の推移	係他係推	資料活用とその留意点	産業に面と背を向した理解構築

	革命に抵抗する動き	工業化が労働者に与えた負の影響			
	革命に対処する動き				
	産業革命は生活水準を向上させたか?	工業化の歴史的意義			
	現在、博物館では産業革命はどのように展示・表現されているか?	工業化の現代から見た意義と見方		解釈構築	
日の沈まぬ帝国	大英帝国の発展の歴史	帝国主義に基づく領土拡大の歴史	事象の変化の理解	事象の正面の側面の理解	帝国主義と領土拡大に関する多面的理解と解釈構築
	なぜ帝国は、発展しえたのか	変化の原因分析			
	帝国は、どのようにしてインドを支配下に置いていったか?	インド	事例研究と因果的分析		
	帝国の一部となったことは、インドに何らかの利益をもたらしたか?				
	探検家たちは、新しい大陸を「発見した」と主張する	オーストラリア			
	アフリカの奪い合い	アフリカ			
	帝国の一部となったことは、アフリカにおけるイギリスの植民地に何らかの利益をもたらしたか?				
	帝国の拡大：児童移民制度	帝国主義がもたらした福祉政策と称する児童移民	事象の負の側面の理解		
	児童移民制度は適切な計画だったか?				
	戦争というもののイメージ：ズルー戦争と兵士の場合	解釈の恣意性	解釈構築		
帝国はどれほど偉大だったのか?	帝国主義の歴史的意義				
中産階級の暮らしぶり	中産階級の人々にインタビュー	概略	中産階級の日常生活の実情	事象の具体的理解	近代の中産階級の生活様式に関する多面的理解と解釈構築
	中産階級とは、どのような仕事をしてきた人たちのことか?	仕事			
	中産階級の人々は、どのような地域で暮らしていたのか?	住宅と都市開発			
	中産階級の人々は、どのような余暇を過ごしていたのか?	余暇			
	絵画やポスターといった印象が入り込みうる視覚資料を、歴史的証拠として信頼することはできるか?	資料の恣意性と活用するうえでの留意点 中産階級の日常生活はどのようなものだったか			
選挙権闘争	1831年時点で選挙権を有していたものと有していなかったもの	選挙法改正以前の選挙権の実態	変化以前の理解	参政権拡大の理解	選挙法改正(参政権の拡大)についての多面的理解と解釈構築
	1831年当時、男子の一部にしか選挙権がなかったのはなぜか?				
	1831年当時、女性に選挙権がなかったのはなぜか?				
	ベントリッチ蜂起-政府は首謀者らに卑劣な罪を仕掛けたのか?	選挙法改正の機運を盛り上げた二つの運動	変化のきっかけの理解		
	改革者たちとの衝突-ピーターラーの虐殺	選挙法改正の歴史と男性の選挙権の推移	変化の理解		
	1832年：第1回選挙法改正とチャーティスト運動				
	1867年と1884年の選挙法改正				
	19世紀後半を通じて、女性への態度は変化したか?	女性への参政権拡大を阻んだ当時の女性観	女性参政権拡大運動の実際	参政権不拡大の理解	
	二人の女性活動家	女性参政権拡大支持派の論理			
	女性参政権をめぐる論争	提唱者とその具体的行動			
	女性参政権論者とその運動				
	過激な女性参政権論者とその運動				
	プロパガンダと女性参政権運動	その方法			
	大義のために死ぬるか?				
	過激な手段は、女性参政権運動を盛り上げたか、それとも妨害したか?	女性の参政権拡大が実現しなかった理由			
1918年に女性が参政権を獲得したのはなぜか、またそれ以前に獲得できなかったのはなぜか?	女性の参政権の拡大と戦争が果たした役割	解釈構築			
女性の参政権が認められるまでに、非常に長い時間がかかった理由は何か?	女性の参政権の拡大を阻んだ要因				
現代の世界 温かい戦争、冷たい戦争	なぜ、戦争を学ばねばならないのか?	戦争が20世紀の社会を変えてきたということ	第1次世界大戦	戦争を学ぶ歴史的・現代的意義	歴史的・現代的課題としての戦争の分析
	ターニングポイント：歴史の流れを変える出来事	戦争が歴史の流れを大きく変更させてきたということ			
	歴史家はどのように過去を整理するのか?	戦争が歴史を形成してきたということ			
	「準備は万全だ!」	開戦前夜の様相			
	1914年のヨーロッパ：最強の軍事力を有していたのはどの国か?				
	ドイツによる開戦	開戦			
	膠着状態!	第1次世界大戦における技術革新とその影響			
	どのようにして膠着状態を脱することができたのか?				
	海戦				
	空戦				
第1次世界大戦は、多くの人間にどのような影響を与えたか?	まとめ				

	戦争と平和に対する反応 戦後：強国の交代 1919 - 1939年：三分野の戦闘への準備 1920年代から30年代における戦争と平和に関する考え方 第2次世界大戦のターニング・ポイントはいつか？ 電撃戦：新種の戦争 空襲 銃後の守りはどのようなものだったのか？ 原子爆弾 - 新しい時代の始まり？ 第2次世界大戦は、世界にどれほど重大な影響を与えたか？ 「冷戦」とは何か？ 核戦争か冷戦か？ 敵国を罵る 冷戦：ヨーロッパの分裂 アジアにおける冷戦：ベトナム戦争 ベトナム：戦争は続けなければならない アジアにおける冷戦：アフガニスタン紛争 戦略防衛計画と冷戦の終結 1990年代の衝突 重要な出来事：あなたならどう判断しますか？	第1次世界大戦の影響 第2次世界大戦開戦へと向かう軌跡 第2次世界大戦の概要 開戦 第2次世界大戦の日常生活への影響 技術革新と新型兵器の開発 まとめ 冷戦というもの 世界における冷戦の影響 冷戦の終結 冷戦後の世界情勢（コソボなど） 解釈構築：戦争がこれまでの歴史や現代社会をどのように変えてきたか	戦間期 第2次世界大戦 冷戦 冷戦終結後	20世紀を通じた戦争と技術発展・社会変革の歴史		
ホロコースト	人権とは何か 1930年代のドイツ ゲットー（ユダヤ人街）での暮らし 強制収容所と絶滅収容所 ナチスに抵抗したのはだれか？ 戦争が終わり、真実が明かされる ホロコーストはなぜ起こってしまったのか？ もう起こりえないのか？ あなただったらどうしていたら	天賦人権という思想 ホロコーストを誘発した当時のドイツの社会状況 ユダヤ人迫害の具体的取組 反ナチス運動の実態 ホロコーストの実態説明 ホロコーストの原因分析 ネオナチや極右政党の台頭など 思考実験：もしその時代のドイツに生まれていたら	ホロコーストの普遍的 問題性 ホロコーストの実情 ホロコーストの課題としての 現在性	歴史的・現代的課題としてのホロコーストの分析		方法の 実践と 現代イ ギリス 社会理 解
20世紀の医学	医学は人々の暮らしをどのように変えたのだろうか？ ライフスタイルは重要か？ 改良の兆し？ 国民保健サービスの誕生 国民保健サービスは継続できるか？ 健康問題を俯瞰的に考えよう すべての人々が健康であるために まだまだ遠い未来の話？	医療技術の進展の意義と効果 生活スタイル改善の意義と効果 兵士としての非有効性を契機とする医療・福祉の整備の必要性 NHSというシステムの構築とその意義 NHSの現状と課題 先進国と途上国の医療格差の問題 途上国の医療・福祉問題の現状と対策 新しい医療技術と医療倫理（デザイナーズベイビーやクローンなど）	医療・福祉政策の普遍的 必要性 国内の医療・福祉問題 世界の医療・福祉問題 医療・福祉問題の残された課題	歴史的・現代的課題としての医療福祉政策の分析		
北アイルランド：なぜ平和には程遠いのか？	分断 分断に至る歴史 分断によって暴力の連鎖を止めることができたか？ 血の日曜日事件：本当は何があったのか知っているだろうか？ 1972 - 1993年：暴力と平和 なぜ平和には程遠いのか？	アイルランドの帰属に関する二つの立場 ユニオニストとナショナリストによる歴史解釈の違い 1960年代から1972年までの対立の歴史 それ以降の対立の歴史 未解決の問題としての現状のまとめ	異なる考え方が併存する状況 対立の歴史	アイルランド問題の解決の困難さ アイルランド問題の深刻さ アイルランド問題の残された課題	歴史的・現代的課題としてのアイルランド問題の分析	

分析対象より、筆者作成。表中の「単元名」は訳出により、「主な学習内容と学習の構造」は、筆者の分析に基づく。

件は何か。そこにこそ、第1巻の構成の意図が内在しているはずである。

結論から述べれば、これら3つの共通点は、現代のイングランド社会にも異なる形態で存在し、かつ中世イングランド社会の固有性を色濃く反映しているもの、と考えられよう。すなわち、王政は現在でも存在するが、現在は立憲君主制であり、当時は絶対王政である。また教会も現在でも存在するが、当時は教会中心（絶対）社会である。日常生活に関しては、指摘するまでもないだろう。とすれば、これら3つのテーマを用いて行う学習は、畢竟、現在との比較に基づく、相違性と類似性の解明という方向に進んでいくと考えられる。

具体的には、まず第1のパートである第1章「王国の統治：ハイリスク・ハイリターンのゲーム」では、冒頭でウィリアム征服王とは何者かについて事実確認を行った後、イギリス史上もっとも有名な王位継承戦争としてのヘースティングスの戦いについて、7つもの節を割いて詳細に検討している。第1章ではこうした学習の後、ウィリアム2世の不自然な死とその後継をめぐる対立、その後即位したヘンリー2世と教会権力との対立を取り上げ、章名が示す通り、王位継承を勝ち取ればハイリターンが約束されるが、そのための暗殺や負ければ斬首ということが普通であったことを具体的に説明している。

続く、「ローヤル・ジャスティス」から「君主制が直面した諸課題」においては、司法制度やマグナカルタなどを取り上げ、当時の君主がどのような政治を行ったかを具体的に解明する過程で、当時の王の権力とその政治制度（君主制）に関して具体的に解明し、最後にその課題をしめしている。

こうした、現代にも異なる形態で存在する事象を取り上げ、その事象の中世社会における実態を説明し、最後にその課題をも提示するという構成は、残る2つのパートにおいても同様である。すなわち、第2のパートである第2章「宗教の権力」では、教会中心の社会であったこととそこでの人々の暮らしぶりを具体的に解明し、ユダヤ人の迫害や墮落といったその課題について説明し、第3のパートである第3章「中世の人々：苦しい生活を送っていたのか？」でも、当時の過酷な暮らしぶりを具体的に示したのち、その不潔さと反乱の頻発について説明している。

各パートで扱われるテーマは政治や宗教、社会や日常生活といった、学習者にとっても身近な要素に関するものである。これら各テーマについて、課題をも含めて取り上げることで、当時はなぜそうだったのかの解明とともに、今とは何が同じで何が違うのかが意識され、比較するという学習活動が促されるのではない

だろうか。冒頭でイングランドの歴史教育は、歴史の学び方を重視していると説明したが、第1巻で取り上げられている事象が、中世を詳細に分かるためとしては不十分であることと重ねて考え合わせれば、第1巻は、比較分析を主眼とする方法の理解のための内容編成とまとめられよう。

ii) 第2巻の構成－変化・因果分析、資料活用を主眼とする方法の理解のための内容編成－

第2巻は、1500年から1750年を対象とし、大きくは2つのパートに分かれている。それぞれのパートにおいて、変化・因果分析と資料活用上の留意点についての学習がそれぞれ行われており、第1巻と同様ではあるが、第1巻とは異なる方法の理解のための内容編成とまとめられよう。

第1のパートは第1章から第3章が相当する。ここでは、エリザベス1世とチャールズ1世、オリバー・クロムウェル、ジャコバイト派がそれぞれ取り上げられ、個人の統治と国内の動乱を通じた国内情勢や対外関係の変化について学習している。

まず、第1章「エリザベス1世と彼女が直面した問題」では、冒頭でチューダー朝の諸王の業績について概略に触れたのち、エリザベス1世即位直前の対外関係と国内情勢について諸課題という形式で説明する。言わば、スタートラインの確認である。本パートでは第3章「ジャコバイトは王位継承にどこまで迫れたか？」の最終節「1746年のヨーロッパの概要」で、ジャコバイト派の反乱が鎮圧された1746年当時の対外関係や国内情勢の概要が示されており、ここまでの変化（軌跡）を、期間中の統治や内乱を通じて確認するという構成になっている。

すなわち第1章では、スタートラインの確認の後、エリザベス1世が具体的に行ったことを国内の融和、対外関係、貧困対策に分けて説明し、その統治によって、対外関係や国内情勢がどのように変化したかをまとめる。続く第2章「チャールズ1世とオリバー・クロムウェル」では、ステュアート朝の諸王の業績の概略を確認したのち、清教徒革命を詳細に検討する過程で、その内乱を通じた国内情勢の推移を確認する構成になっている。そして第3章では、イギリス継承戦争を取り上げ、その軌跡を詳細に検討する過程で対外関係の推移を確認する。

第1のパートでは、これら特定の個人の統治や特定の内乱を取り上げ、それによっていかなる変化が起こったかを因果的に確認しており、3つの章にまたがって、250年間という第2巻が対象とするすべての年代を通じた、主に対外関係についての変化とその原因を学習する構成といえる。

続く第2のパートは単元4「時代のイメージ」が相

当する。ここでは、エリザベス1世の肖像画とエリザベス1世を描いた現代の映画を手がかりに、表現されたものを資料として用いることの有効性と課題について学習したのち、19世紀の歴史家による企画展と20世紀の歴史家による企画展とを比較する過程で、時代像が企画展の構成（時代の解釈）に相違性をもたらすことを具体的に説明し、過去を表現する（歴史を解釈する）ということとその社会との関わりについて具体的に考察するパートといえる。すなわち、エリザベス1世を具体的題材に、資料活用とその留意点について考察するパートといえよう。

第2巻はこのように、1500年から1750年という対象は同じであるが、2つの方法を習得することに特化した内容構成とまとめられるだろう。

iii) 第3巻の構成－事象の多面的理解と解釈構築による方法の応用のための内容編成－

第3巻は1750年から1900年を対象とし、4つの章で構成されている。それぞれが独立したパートとして、現代イギリス社会の理解に資するテーマ（事象）について、多面的に理解し、それに基づき解釈を構築する学習を行っている。第1・2巻で習得した方法を選択的・複合的に用いながら、現代イギリス社会の部分的理解にも資する教育内容編成とまとめられよう。

第1のパートは、第1章「何もかもが変化した：産業革命」が相当する。ここでは、冒頭で現在のブリテンは工業化していること、そのスタートがこの時代の産業革命にあったことを提示する。その上で、変化の方法を用いて産業革命が社会をどのように変えたかを、農業、輸送、産業に分けて学習する。続いて因果の方法を用いて、そうした産業革命がいかなる原因や要因によって成立し、またいかなる正の影響を与えたかを学習する。ここまでで、現代社会の成立のターニングポイントとしての産業革命の正の側面の学習を行っているまとめられる。

続く「国王のリーズ巡行」以降は、逆に産業革命の負の側面の学習に移る。当時の都市生活の不衛生さや労働環境の不健全さ、ラッドライトなどを取り上げ、産業革命がもたらした負の側面を同じく因果的に学習する。その上で、章末の2つの節において、ここまでで行った産業革命に関する多面（両面）的理解をもとに、工業化の歴史的意義と現代的意義の2つについて、それぞれに解釈を構築するという学習を行っている。このように、第1のパートは、工業化と産業革命に関する多面的理解と解釈構築を行うパートと位置付けられよう。

残る3つのパートも、基本的な学習過程は同じである。それぞれ、大英帝国、中産階級の暮らしぶり、選挙権というテーマを取り上げ、多面的に学習したのち

解釈構築を行っている。

第3巻で取り上げられているのは、現在のイギリスの産業の基礎を構築した産業革命、現在の国際情勢やイギリス連邦加盟国の現状を部分的に規定している大英帝国、現在の都市や生活スタイルの基盤を構築した中産階級の登場、現在の普通選挙を実現した選挙権闘争、なのであるから、1750年から1900年にかけて発生した事象のうち現代イギリス社会の部分的理解をも可能にする教材を選択し、これまでに習得した方法を選択的・複合的に用いて多面的理解、解釈構築をすることを目的とした内容構成といえよう。

iv) 第4巻の構成－課題の歴史的解析とその解決策の模索による方法の実践のための内容編成－

第4巻は20世紀を対象とし、4つの章で構成されている。第3巻と同様、それぞれが独立したパートとして、現代的な4つの諸課題を取り上げ、その歴史的解析と解決策を模索する学習を行っている。第1・2巻で獲得した方法を用い、第3巻で行ったように問題について分析・解釈し、どうすればいいかを実践的・応用的に考察する教育内容編成と言えよう。

例えば第2のパートである第2章「ホロコースト」では、冒頭の節「人権とは何か」で天賦人権という概念が提示される。第2次世界大戦中のホロコーストをその時代固有の問題として考察するのではなく、人権侵害という観点から、普遍的な問題として意識させる意図と考えられる。その上で、第2次世界大戦中にホロコーストがなぜ起こったのかを分析させる。そして「もう起こりえないのか？」で、現代のネオナチの問題などを指摘し、「あなただったらどうしていたらどうか？」で思考実験として、その時代に生きてその現象に遭遇していたらどうしていたかを考えさせている。これら2つの節でホロコーストの課題としての現在性について自覚を促し解決の必要性を意識させているのである。

残る3つのパートでも同様である。第2のパートのように過去の課題の現在性を指摘する方法や、第1・第4のパートのように、過去から存在し現在でも解決していない問題（戦争やアイルランド）、第3のパートのように、部分的な解決や社会の変化によって新たな問題性が生じてきている問題（医療と福祉）など、取り上げる問題の性質によってその取り上げ方に多少の違いはあるが、今後解決していかなければならない問題を取り上げ、問題について分析・解釈し、どうすればいいかを実践的・応用的に考察させているといえる。

さらに、これら4つの問題に関しては、本シリーズの第1巻から第3巻までにおいて、何度も登場してきているという共通点も存在する。例えば、ホロコース

トに関しては、第1巻においてユダヤの迫害について学習する節が存在し、第2巻でも、エリザベス1世の宗教政策の中で、異端や宗教対立という形式で間接的にではあるが触れられている。戦争、医療と福祉、対アイルランド問題も同様である。第4巻の学習に際し、こうした過去の単元に立ち返れば、その問題の普遍性と問題の根深さを垣間見ることでもできよう。

このようにしてみると、第4巻では、20世紀に発生した諸問題のうち、現在のイギリス社会においても解決が必要な問題であり、普遍性と根深い問題性を有している課題を4つ選択的に取り上げ、その課題の分析と解決策の模索を行う過程で、方法の実践と現代のイギリス社会の課題性の解明を目指す内容編成とまとめられよう。

これまでの分析をまとめると、本シリーズは、現代イギリス社会の諸課題を考察・解決できる市民の育成を念頭に、第4巻の学習をより効果的に行うために、第1巻から第3巻を組織したシリーズといえよう。

### III. 教育内容編成の特質

本節では、前節で検討した本シリーズの全体構成に基づき、我が国の「歴史総合」のカリキュラムを構築する際に参考になりうるポイントを4つに分け、それぞれ指摘しよう。

#### i) 自国史・世界史融合型教育内容編成

兪氏も分析・検討したように、本シリーズは、自国史と世界史を融合した教育内容編成を取っていることに、その特質がある。ただし、第1巻や第2巻において自国とはイングランドを指し、第3巻では自国とは大英帝国全体をさす。また第4巻での自国とは、グレートブリテン島を指すものと考えられる。現時点での認識に基づき自国という概念をとらえるべきではないということは、我が国の歴史教育においても意識すべき視点とは考えるが、本シリーズを含むイングランドの歴史教育における自国史と世界史の融合の詳細に関しては、別稿で再検討が必要だろう。

#### ii) 目的重視型教育内容編成

これまでの分析からも明らかなように、本シリーズは、確かに1066年以降のイングランドを中心とした地域の歴史事象を主たる対象として内容を編成しているが、第1巻や第2巻では、あくまでも方法の理解のために必要な項目のみを選択しており、これだけではイングランドの中世史を分かることは難しい。とすれば、内容ではなく、目標を念頭に置いた目的重視型教育内容編成とまとめられよう。

#### iii) 目的の三段階モデル

ならば、その目的はいかにして配列されているか。前節でも検討した通り、本シリーズは、第1巻と第2巻において、方法の理解として、比較、変化・因果、資料活用の3つの方略の習得が目指されていた。比較と変化・因果に関しては内容的側面、資料活用に関しては方法的側面といえる。また、それを踏まえて第3巻では、方法の応用として、前巻までに習得した方法を選択的に用いて、現代イギリス社会を部分的に説明しうる近代の事象に関して、多面的に考察し、解釈を構築することが目指されていた。論理的にある事象に対して解釈（見方・考え方）を構築する過程といえる。さらに第4巻では、方法の実践として、現代イギリスにおいて解決が目指されている諸課題に関して、歴史的に分析し、その解決策を模索するということが行われている。実践的にある課題に関して解釈（見方・考え方）を構築する過程といえる。

このように見えてくると、方法の理解、応用、実践の3つの過程を系統的・段階的に組織しており、我が国の「歴史総合」の⑤の特質を具体的する内容編成とまとめられよう。

他方、我が国の「歴史総合」は、冒頭にこそ「歴史の扉」という単元が存在し、歴史というものの本質的な理解を促したり、資料の特質について理解したりする<sup>6)</sup>が、内容のB、C、Dの各項目では、これら3つの過程を同時並行に行うことになると考えられる。同シリーズのように同時並行ではなく、個別の積み重ねの方が、教育の視点が明確化し、より教育効果が期待できるとするならば、内容のB、C、Dそれぞれにおいて、3つの過程のそれぞれに特化した教材を段階的に配列して学習するという形式で、カリキュラムを再構築することの方が効果的とは考えられないだろうか。仮に時間的制約等により「歴史総合」だけで困難であるのであれば、より長期的な視野に立って、他の学校階梯や科目との連携を考えることも必要ではないか。そうしたカリキュラムの消費者からの脱却こそが、これからの教師には求められよう。なお、言うまでもないが、その教育目標を実現することを主眼とした内容（教材）を配列すればよいのであって、本シリーズのように、中世史から始めることを推奨しているわけではない。

#### iv) 課題解決型教育内容編成

では、本シリーズは、それら目的を段階的に配列することで、いかなる目標の実現を志向するシリーズとまとめられようか。

本シリーズは、第4巻が課題の歴史的分析とその解決策の模索による方法の実践のための内容編成となっていた。我が国の「歴史総合」にも、「近代化と現代

的な諸課題」といった項目が存在する<sup>7)</sup>ことから、類似した内容編成と推察される。しかし本シリーズは、この第4巻での課題解決を可能にするために、第1巻から第3巻まで、そのための布石を打っていることにその特質が存在する。第1巻と第2巻では課題解決のための方法的理解を、第3巻では解釈構築のための多面的・多角的分析と現代社会の部分的理解を、そして第1巻から第3巻のそれぞれで、可能な限り、第4巻で登場することになる課題に関して、部分的にでも触れておくことで、事後に学習する問題の普遍性と問題の根深さに事後に気づかせる構成となっている。

ある課題を解決するためには、その課題の発生・経緯を歴史的に分析・把握するだけでは困難ではないだろうか。内容的にも方法的にも布石を打った本シリーズのような構成をとることで、「歴史総合」が目指す④の特質を真に実現しうる、課題に関するより深い考察と実践的な解決策の提案が可能となるカリキュラムとなりえよう。

#### IV. おわりにー「歴史総合」のカリキュラム・マネジメントに向けてー

本小論の目的は、イングランドの歴史教科書シリーズを手がかりに、まもなく我が国の高等学校に導入される、科目「歴史総合」の教育効果をより高めるために必要な、教師によるカリキュラム・マネジメントの指針となりうる、同シリーズの教育内容編成構造を説明することにあった。

分析の結果、我が国の「歴史総合」が有する5つの特質のうち、①と②を除く3つに関して、教育効果をより高めることが可能といえる3つの内容編成構造を具体的に解明でき、②についても詳細に分析・検討可能な対象であることを指摘できた。

新学習指導要領では、教師によるカリキュラム・マネジメントが重視されている。しかし、それがおざな

りに実施されないようにするためには、そのための指針や方略を具体的にいくつか提示し、教師が、自分が教える学習者の特質を踏まえながらマネジメントを行えるよう理論的にサポートすることが必要となる。本小論は、そのための一つの在り方の指針を示したに過ぎないが、具体的なカリキュラム構築の一助たりえよう。

#### 注

- 1) 分析対象は以下のとおりである。
  - ・ McAleavy, Tony, Wrenn, Andrew, Worrall, Keith, *Presenting the Past 1: Britain 1066-1500*, Collins, 2001.
  - ・ Wrenn, Andrew, Worrall, Keith, *Presenting the Past 2: Britain 1500-1750*, Collins, 2002.
  - ・ Grey, Paul, Little, Rosemary, Worrall, Keith, *Presenting the Past 3: Britain 1750-1900*, Collins, 2002.
  - ・ Sparey, Elizabeth, Worrall, Keith, Johnson, Sue, *Presenting the Past 4: The Modern World*, Collins, 2003.
- 2) 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』 pp. 21-23. ([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/17/1407073\\_03.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/17/1407073_03.pdf)) (最終アクセス 2018年9月10日)
- 3) カリキュラム・マネジメントの必要性と意義に関しては、下記の文献などが詳しい。
  - D. ロートン著、勝野正章訳『教育課程改革と教師の専門職性ーナショナル・カリキュラムを超えて』学文社、1998年。
- 4) 拙稿「歴史教育内容編成の構造と原理ーイングランド、91年版ナショナル・カリキュラムを手がかりとしてー」『社会科研究』第62号、2005年、pp. 31-40、など。
- 5) 兪敬兒「自国史・世界史融合カリキュラムとしての歴史教育内容構成の探究ーイギリスKS3用教科書『現代の世界』を手がかりにしてー」『社会科研究』第70号、2009年、pp. 51-60。
- 6) 前掲2), p. 59.
- 7) 同上, p. 61.